

「崖から落ちたんだよ。ずっと目が覚めなくて……」

「崖から……そうか、それでお前に助けられたのか」

「いや、助けたのはオレじゃ……」

オレはその場にいなかった、と言いかけて、もしかしたら記憶が混乱しているのかもしれない気がついた。

マリ先生にも長時間意識が無かったならそういう事があるかもしれないと聞いていたから、オレはナオヤの神経を刺激しないように口を噤み様子を窺った。

戸惑うオレの瞳を覗きこみ、彼は心配そうな声音で言った。

「どうしたアベル？」

「え？」

「俺が怪我をしたと言ったな。それで、ここはどこだ？」

「あの……えつと……ここは、ナオヤの部屋だよ」

じつとオレを見つめるばかりで何も言わない。何だか急に不安になって訊ねた。

「何で、いきなりオレの事アベルって……」

ナオヤはオレをアベルとは呼ばないはずだ。《弟》として同一視されているかもしれないけれども、オレをオレではない人の名前で呼ぶ程無神経ではなかった。

「幾ら崖から落ちてもそれぐらいは覚えているさ。アベル、お前は俺のたった一人の弟だからな」

ぞつとするような寒気が背中を走っていった。それが悪い予感というもののだとは、彼の次の言葉を待つ前に解っていた。

「……じゃあ、貴方の名前を言ってみて。憶えてる？」

「いったいどうしたんだ。自分の名前を忘れるはずがないだろう」

まさかという思いと、怒られても良いから否定してほしいという思いが胸の内に渦巻く。

「もしかして……カイン……まさか、そんな」

「どうしたアベル？ そんなに心配させたか？」

優しい声は気が遠くなるような目眩を引き起こす。朝食に來ないのを心配したマリ先生が様子を見に来る

まで、オレは呆然とベッドの横に置いた椅子に座りこんでいたらしい。その脇で、彼は心配そうにオレに声をかけていたようだ。

目覚めた彼はどこか痛いと訴える事も無く、食欲も普通にあるようだった。二人で軽い食事を摂りながらオレは彼がどういう状態なのか探り探り少しずつ会話をした。

「俺が怪我をしたからここへ連れてきてくれたのか？」

「うん。そうだよ。あの……ここでゆっくり療養すればいい。治るまで無理はしないで」

「大袈裟だな。見たところそこまでひどい傷ではないだ

ろう。きっと神がお護りくださったのだ」

「そ……うだね……」

信じられない言葉だった。頭がくらくらする。

着替える時に見た自分の身体の傷で、とりあえず崖から落ちたという事は信じてくれたようだ。最初に悪魔がどうか彼が不審に思うような内容を話しかけなくて良かったと思うと同時に、これからどうすれば良いのか解らなくてオレは途方に暮れていた。

彼は自分が《カイン》だと信じこんでいる。そして目の前のオレを《アベル》と呼んだ。

事故のショックで記憶が混乱しているのか、それとも人格交替というやつなのかは判らない。オレをからかっているのではないという事だけは確かだった。ナオヤにとって自分が《カイン》であった過去や《アベル》の存在は決して冗談に出来ない重いものだ。

他の仲間達にも《カイン》についてはこれまで一度も話した事が無かった。だから、今この状態の彼をヒルズに連れて帰ったとしてどうやって説明すれば良いのか見当もつかない。けれど魔王軍の一員である彼の安全な居場所と言えればヒルズに勝るものは無く、どうやら《カイン》の人格らしい状態のまま他の場所へ連れていくわけにもいかなかった。

マリ先生に相談して、混乱させない為にもアツロウやカイドー、それに悪魔達に会わせるのはしばらく見合わせたほうが良いという助言を貰った。

「記憶障害……いえ、ナオヤさんだという自覚が無いようだから人格交替というのかしら。そういった状態があると知っているけれど、私では判断出来ないわ」

「オレも解らないです」

彼が《カイン》である事は理解しても、ナオヤが記憶喪失になってそうなったのか、それとも他の要因があるのかはオレにも解らなかった。多重人格というのではなると知っていたが、オレはナオヤが神話の時代のカインという存在だとはどうしても言えなかった。ナオヤがようやくオレに話してくれた重すぎる過去を勝手に他人に話すわけにはいかない。

少し二人だけで過ごしたいと伝えてマリ先生には席を外してもらった。

「彼女は医者か？」

「お医者さんじゃないけど、病気や怪我を看る仕事をしている事もあるよ。だからナオ……カイン兄さんの怪我もちゃんと治してくれるから心配しないで」

そう伝えると彼は少し安心したようだった。ここは彼にとっては見知らぬ場所、《アベル》だと思ひこんで